

市民運動からの逆流

—ことしのアメリカ労働運動への期待—

アメリカの労働組織は、巨大な機構と財力と、そして完全に体制のなかに組み込まれた労働貴族の君臨によって、なぐつてもなぐつても倒れぬ不動の巨塔となつて、労働者との間に、労働者と結ぶつたむしる「保守王国」ともいふべきものであった。

それは、ベトナム反戦に際しても、黒人の市民権闘争に際しても、あれほど学生、婦人、市民の諸団体が果敢な活動をくりひろげ、もはやアメリカの市民社会では無視できない大きな問題であるにもかかわらず、おどろくべき無感覚さで、まったく関知しない態度のままで存在している、という一事でも明らかである。

だが、一九六八年のアメリカ労働運動は、泥沼化したベトナム戦争、黒人暴動、ポンド切り下げに つづくドル危機などをめぐって、つらく硬直・固定化した組織にも流動化のきざしが出てくるものと思われる。

すでにその前兆はあらわれていて、たとえば昨年、教員たちが統制に抗して、敢然と非合法ストをなしたことが、この問題やその半面、十二月パールハーバーでのAFL-CIO大会では日本の総評

代表団を拒否して、あくまでジョンソンのベトナム戦争遂行の積極的支持を表明した狂態の混乱、また指導権をめぐってルーサーとミニーの対立が表面化してきたことなど、まさにその危機的な変化の先づれともいふべきものである。そしてその体質的矛盾の露出と苦闘はいよいよ激化せざるをえないであろう。

つまりアメリカの労働者は、とくにベトナム戦争の拡大深刻化を契機として、また労働組織として、ベトナム反戦に立ち上がりえないうちでも、学生や婦人市民団体との立ち上がりのおかげで、一介の市

春闘はどこまで闘える

日本労運の病源は深い

春闘と言えは賃金闘争が主軸である。すでに日経連は、今年の賃上額を本給の六〇程度(二、五〇〇円程度)が妥当なものとして、F・J・C系が七、〇〇〇円、同盟系が五、〇〇〇円程度となつてい

春闘と言えは賃金闘争が主軸である。すでに日経連は、今年の賃上額を本給の六〇程度(二、五〇〇円程度)が妥当なものとして、F・J・C系が七、〇〇〇円、同盟系が五、〇〇〇円程度となつてい

たたきつぶせ!

企業別組合の宿命

鎖された労資協調・共済団体に墮落し、のちの産業報国会に變形していった。さらには戦後に誕生した企業組合結成の基礎をなした。このようにして、大正から昭和初期にかけての労働運動は、もっぱら横断的組織をもつ中小企業を中心として、はげしくおこなわれてきたのである。

一、定量的にみて

一九二四年、内務省(労働運動年報)によれば、「一工場一企業を単位とするもの少なく、わずか八三三団体にすぎず、他はいずれも

年	組合数	組合員数	争議数	参加人員	争議の結果
二六	四八八	二八四、七三九	四五五	六七、二三四	一六一
二七	五〇五	三〇九、四九三	三三三	四八、六七二	一一九
二八	五〇一	三〇八、九〇〇	三三三	四三、三三七	一〇九
二九	六三〇	三三〇、九八五	五二一	七二、二八一	一三七

れば典型的に問題点があらわれている。従来、鉄鋼労連は本部拡充に努め、妥協権などを移譲するために各単組において団体確立の全員投票を行ってきた。今年の場合も、やはり本部に闘争委を設置するけれども大手と中小を別個の闘争委に切りはなしている。また本部闘争委が指令を出す前に中間機関各単組執行部の承認を得てから出すことに改めている。改定の理由として、各単組の自主性々と体裁の良しさを言っているけれども決定に至るまでの意見の中に「拡充の構成が比例制でないため中小に比し大手の委員の数が割合として少い。このことは小部(中小)が多数(大手)を生ずることになる。そのような構成の拡充がストが決まれば大手は従わなければならない。それは大手にとって権威にかかわる問題である」。

前回で各人の紹介を終わろうとしたが、まだ一人是非とも書きたい人物を思い出した。新谷三郎である。同君の黒色自由労働者組合加入は可成り遅かった。それは同君が大杉栄復讐事件に連座して六年の実刑を受け出獄してからである。新谷君は京都で旋盤工をしていて、同志に頼まれて身に降りかかる罪を恐れ爆弾のケースを造ったのだ。それで造った爆弾が古田太次郎等によって青山基地、銀座街頭、川崎鉄橋で試爆したのだ。

テロリストの一翼を帯びた先輩として若いAC労働者連盟員は新谷君の上京参加を期待して両手をあげて歓迎したのだが、新谷君はある意味では全然期待はずれであった。というのは、何を訊いても少くも過去を語らず、我々が期待していた手話も獄中生活に就ても語ろうとしなかった。

黒色自由労働者組合とAC労働者連盟の思い出

横倉辰次

「いや、僕は違います、ギロチン団員ではありませんし失敗者です。ホンのお手伝をしただけで何も知りません」の一点張りだった。そして彼は低賃金の人夫として働いていた。

四の橋の任人が主体となりAC労働者連盟の創設期には黒連一派なる者と反目し不和であったが、武良の亡命や、黒連の上田章などACとも仲良くしていた者がいて、次第に両者は融和して、黒連の一部の者が黒色自由労働者組合をたよって来て働くようになった。上田光麿、北浦漢、高橋寿之介、藤尾清三郎といった者達で、彼等は略(リ)ヤ屋で暮らしていた者達であり、岩佐老人の薫陶を受けて純粋アナキストを以て任じていたから決して労働組合運動には関心がなく、むしろ軽蔑していたから略もやり、日当が得られるから自由労働者やという風であったから、労働者としては逸脱して異質の者であり、組合運動にはプラスにはならず、むしろマイナスであったが、それだけに鼻柱が強く闘争的ではあった。

前記の如く自由労働者組合には江東自由労働者組合という百人以上の大きな組合が干渉方面にあり、歌川新、渡辺功、高田格といった理論家が指導していて、これ等の者は、アナキズムの労働運動にも階級闘争、日常闘争(賃金闘争)を入れるべきだという信念から全国自由連合組合から脱退して全自由なる組合傘下にいた。この江東自由労働者組合の芝浦支部

が芝浦職安を中心にしてあった。支部といっても三、四十名いて黒色自由労働者組合より大きかったのだが、意識も低く活発度も薄く小人数の我々の黒色自由労働者組合に押され気味でもあり、いつれからも挑戦しなかつたので、現在、相反目しながらも事なきを得ていたのだが、黒連の連中が黒色自由と合流するや、

「奴らはボルドア、アナキストがボルドアと並立しているではない」「ボルドアはアナキストの敵だ。ソビエトでは多くのアナキストがボルドアに虐殺されているんだ。黒色自由は手ぬるい」「ボルドアの組合を叩きつぶせ」と言い、挑戦すべくアナキリ戦宣言ともいふべき行動に出た。それが、それは職安で相互に獲得している翌日の就労カードを職安に押しつけて、職安員を脅して江東支部の分まで全部強奪してきてしまったのだ。

これでは江東支部の者はアブレてしまつ、アブレは餓死に通じる。この迫害に対して我慢ならぬ江東支部は黒色自由に対して三十四対四十でも勝算がないと思つたか、江東の本部から五十人からの応援を求めて黒色自由に対して殲滅戦の一大反撃を開始したのだ。その決戦場は芝浦監獄であった。

(以下次号)

通信

〇このたび、新労組の準備組織ができることを聞きましたが、大変うれしいことです。個人加盟でもよい、真に自覚した労働者が結集することによって少数でも志のあるものになるでしょう。

(大阪 R生)

〇苦勞のことと思いますが、昨年の決定とおり、新しい労働団体の結成をねり強く進めて下さい。期待しています。

(名古屋 中田)